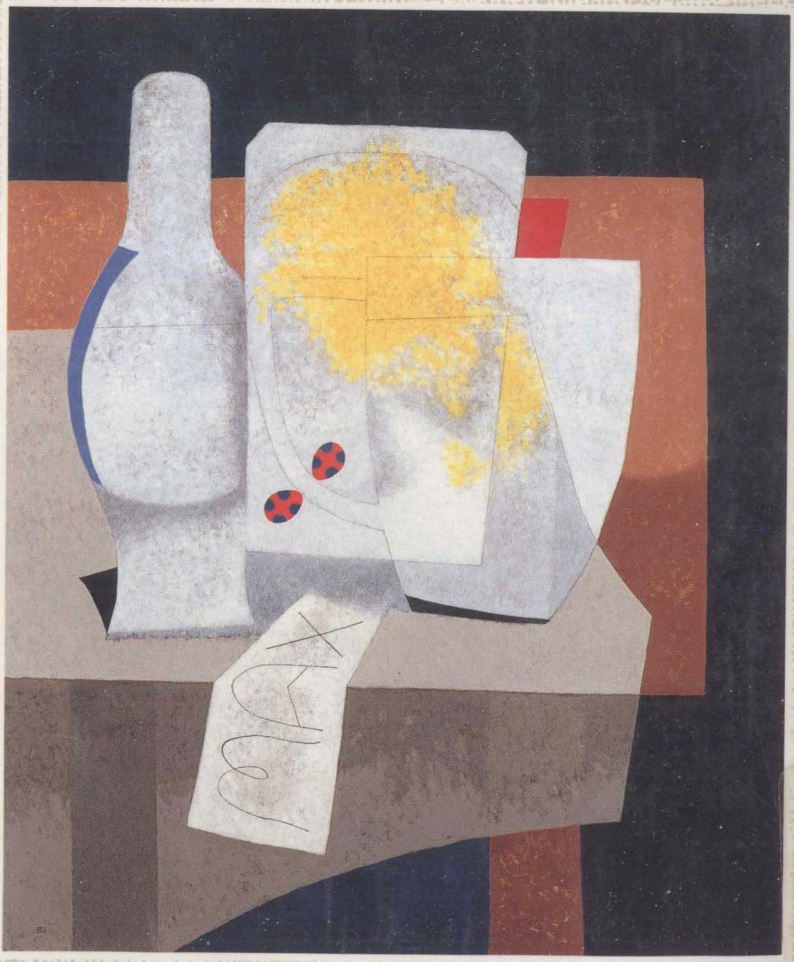
食卓の廃墟

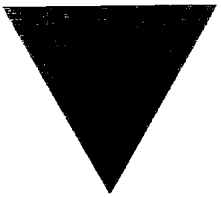
坂口和子



ドメス出版

食卓の廃墟

坂口和子



坂口和子　さかぐち　かずこ
1931年　東京生まれ
エッセイスト
日本エッセイストクラブ会員
日本石仏協会会長
著　書　『千手幻影』（言叢社）で第十五回
　　埼玉文芸賞受賞 1984年
　　『奥武蔵の石仏』（文化新聞社）
　　その他，石仏・郷土史関係の共著多数
現住所　〒357 埼玉県飯能市小瀬戸 29

食卓の廃墟

1991年12月8日　第1刷発行
定　価　1854円（本体1800円・税54円）
著　者　坂口和子
発行者　今田喬士
発行所　株式会社 ドメス出版
　　東京都豊島区駒込 1-3-15
　　振替東京 8-48766
　　電話 03-3944-5651
印刷所　有限会社 教文堂

製本／明光社　装幀／入野正男
©坂口和子　1991 Printed in Japan
乱丁・落丁の場合はおとりかえいたします
ISBN4-8107-0324-X　C0095

食卓の廃墟　目次

＊
花の名前　9
花　束　14
じゃがいも忌　18
百日紅　23
秋は寂しいということについて　28
秋を送る　33
赤　38
都会の憂鬱　44
綿のはなし　50
合歓の咲くころ　55
＊＊
闇　65
ほたる川　70

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

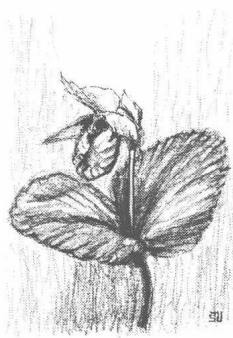
花とねずみ　75
カラス談義　81
おたまじゃくし受難　87
偕老同穴　94
老犬たち　99
く　せ　104
食卓の廃墟　109
＊＊＊
終焉の地　121
長風呂　126
捨てる　132
ポスト　137
吹割の滝　142
松の盆栽　147

女のハンドバッグ 154
泣きぼくろ 159
＊＊＊＊
一陽来復 167
涙街道 172
見えないアンテナ 178
コーちゃんの記念写真 186
穴に棲む 191
ラブコール 198
卒哭忌 204
雪追想 209
たたむ 214
あとがき 219

カバー・中扉絵　金子　弘

食卓の廃墟

*



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

花の名前

つくば山麓に住む友人志のぶさんを訪ねたときのこと。その町の名所になっているつつじ園に連れていかれた。老夫婦の個人経営だという手作りの観光地である。

なだらかな山の斜面は丈の高い山つつじが満開で、アブがとびまわっていた。燃え立つつつじのその向こうに、陽に輝いた平野がのどかにひろがっている。雄大な風景ととり立ての山菜を肴に、ビールを飲んでいると「すべて世はこともなし」の心地になってくる。「おや、あそこに何か植えてある。――」視界の隅によしず張りの一角が映ったので、私は志のぶさんに話しかけた。

「多分、くまがい草じゃないかしら。栽培してるってきいたわ」

そこへ園主の老人が手拭いで顔をふきながらあらわれた。

「どれ、ああ、……ぐさね。この辺ではそう呼ぶよ」
私は仰天した。そして上野千鶴子氏の近著『女遊び』のページを開いたときの仰天ぶりを思い出した。『女遊び』にはのっけから、私たちが口外することのない言葉が氾濫していたのだから。――老主人があっけらかんとそう発声したとき、いあわせた女三人は一瞬息をとめた。突然異質の物体で空気を裂かれた感じだった。
志のぶさんのお供の光田さんがそのとき、
「ほらここに、おきな草。うちのほうではカワラケボンボっていうのよ。恥ずかしいわね。――」
と傍の鉢を指差した。みると白い透きとおった糸のような毛が、ふんわりと風に揺れている。明るい陽の下で、その名称はいかにも愛らしく響いた。漢名の白頭公、和名の翁草よりもずっと、ひとと植物の間柄が親しげではないか。おきな草は赤紫色の小さな鐘状の花をうつむきに咲かせ、この花芯がのち、長い白毛のある実を結ぶ。たしかに老翁の白髪を思わせるけれど、学術とは別のところで、ひとはそれぞれの花を見、

自分たちの花にしているようだ。

くまがい草にしても同じなのだろう。私はその一鉢をもっていた。千葉県清澄山の土産物やの店先でみつけ、大喜びで持ち帰ったものだ。勝手に採取してはいけないと聞くラン科の珍しい花で、茶花としても一度使ってみたい花だった。花の咲くのを楽しみに毎日眺めているうちに、くまがい草という名はいつからつけられたのか気になりだした。

美しい扇形の二枚の葉の間からスッと一本の茎がのび、頂上に横向きに花がぶらさがり、空豆形のふうせんのように膨らんでくる。淡い緑白色のふくろ状の唇弁には紫色の斑点があり、奇妙でおもしろい形だが妙に淫靡なイメージをもっている。その命名は、袋形の唇弁を熊谷直実が背負った母衣(ほろ)(武士が背中に負うて矢を防いだ袋)に例えてのことだという。そういわれても母衣などみたことのない現代人には摑みにくいイメージだったと思われる。物珍しさもあって写真をとったり、スケッチしたりして観察していると、くまがい草ではない別の名があってもよさそうな、と思い始めた。

花の名前はもともと人間が便宜的につけたもので、花の姿をみて直感的に感じとった印象を名付けたり、他のものにたとえたり、優雅に表現しようと苦心したりするものらしい。くまがい草の名付親はよほど高尚で、文学的な人だったのだろう。しかし人間の感性はどこかに土俗的な皮膚感覚を包含しているものだから、案外植物の方言とか俗言で表現されていそうだとも思った。何か手がかりはないかと書物を漁ってみたが、熊谷直実一点ばりだった。それが老園主のひとことで氷解したような気分になった。そう思い、そう見る人がいるからそんな名前がついたのだろう。直実公が聞いたらさぞ気を悪くなさるだろうとおかしくなった。

そんな話をしていると、老園主がまた小さな鉢を持ってきた。

「これがジジババですよ。――しゅんらんです」という。

しゅんらんなら家の築山の陰にひっそりと生きている。けさも花が咲いているのを確かめたばかりだ。

私の住んでいる土地でもこの花をジジババと呼んでいる。しゅんらんなんて気取っ

た名は聞かない。昨春近くの山を歩いたとき、淡い黄みどり色の静かな風情にひかれて、二株ほどもらってきた。

茎の高さ十センチ、その先に一個だけの目立たない可憐な花に、なぜジジババという名前がついたのだろう。不思議なことは何でもみつづけるクセのある私のこと、いつのまにか花の姿を記憶するようになった。そしてその花芯に命名の由来があることに気がついた。これは上下で抱擁している姿を男女にみたてたものだ。

陽のささぬ木の間隠れ、地上十センチほどの空間で、だれにも知られずひっそりとお互いを確かめあっている小さな姿。地の花とも呼びたいこのつつましい和蘭は、日夜ただひたすらに恍惚の世界に閉じこもる。ひとに与えられた名前などにはおかまいなく。――

いのちを燃焼しつくして、力を失い、枯れて褐色に衣がえしても、まだじっと同化したままの姿で時のなかに身を置いている。この花にジジババという名を与えた里人の感覚はやはり素晴しい。

花　束

蛇行する川にそって幾つものカーブを繰り返しながら、町へ向かって延びる県道のなかほどに、右手は深い谷、左手は高い崖になっている個所がある。崖は土砂崩れをふせぐコンクリート壁だ。

道が弧を描いてカーブする頂点あたりの壁ぎわに、ある日突然数個の花束が置かれた。それは一瞬目をみはるほどの賑やかさで、コンクリートの一点を彩った。黒いリボンをかけた贈りもの用や、買物の帰りに店先で買ったと思われる小さな花束や、花屋の店頭にある出来合いの仏前用や、庭の花を無造作に切りとったらしい大きな花束などだ。

花束のほかにタバコやお酒、コーラ、マスコット人形などがひとかたまりになって

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.